農業・農協問題研究所　東海支部の研究例会（企画素案）

日時：平成６（2024）年３月２０日（水・祝）１３：００～１６：３０
会場：名古屋都市センター　会議室１・２（金山総合駅から徒歩すぐ）

１．　研究例会のテーマ
国産小麦の普及～東海地域の事例から～

タイトル案：　地消（商）地産ですすめる国産小麦の普及～東海地域の現状から～

２．　開催趣旨
スーパーや飲食店等で、「国産小麦使用」「〇〇県産小麦100％」を目にしたことがありませんか？
国産小麦を使った製品が、ここ数年、実際に増加してきており、今後さらに増加する機運が高まっています。
その背景に、ロシアのウクライナ侵攻や海外主要生産国の気象変動に伴う国内大手実需者の輸入小麦の調達不安の増大、外国産に負けない品質の国内品種の生産増加傾向が挙げられます。
また、東海地域では、きしめん・味噌煮込みうどん・伊勢うどん等の独自の麺文化に対応して、地消地産※の小麦生産も徐々に増えてきています。
しかしながら、生産面では品質や単収のバラつきが大きい、流通面では小回りの利く地元製粉業者の対応余力が小さいなどの問題点も指摘されており、国産小麦の普及拡大にとっての課題もあります。
そこで、本研究例会では、東海地域を事例にとりながら、生産・流通・消費の各側面から国産小麦の今後の普及拡大に向けて何が必要なのかを検討していきます。

※地消地産：
一般的には地産地消であるが、地域で消費される食品（及びその原料）をその地域でできる限り生産しようという考え方。管見では富山県JA氷見市の使用が初めてであり、これを発展させた「国消国産」をJA全中が数年前から使用している。地産地消はプロダクトアウトの意味合いが含包されており、消費・実需者のニーズを出発点とするマーケティングの考え方に立つと「地消地産」となる。
地**商**地産は島根県JA雲南（現・JAしまね）が使用した言葉で、都市（商業地）で必要とするものを田舎が生産するという意味。今回では、地消の消は消費者の意味になってしまい、製粉業者・製麺業者等の食品事業者（＝商）が求めるものを、その事業者に近い農家・生産者サイドが生産するという意味に変換している。

３．　研究例会の進行スケジュール

13:00 ～	13:05	（　5 分）	開会あいさつ	支部長：長澤　真史（東京農業大学名誉教授、農業経済学）	
13:05 ～	13:15	（ 10 分）	座長解題	李　侖美　岐阜大学応用生物科学部　准教授（農業経済学）	
13:15 ～	13:40	（ 25 分）	特別報告１	内諾）井狩　篤士　滋賀県近江八幡市　イカリファーム　代表	
13:40 ～	14:05	（ 25 分）	特別報告２	内諾）藤井　潔　JAあいち豊田　営農生活部営農相談課　専門技術員	
14:05 ～	14:10	（　5 分）	休憩		
14:10 ～	14:35	（ 25 分）	実践報告①（生産者）	愛知県から　（案）小野田　裕二　愛知県西尾市　おのだ農園代表	
14:35 ～	15:00	（ 25 分）	実践報告②（生産者）	内諾）奥澤　重久　三重県伊賀市 三重県農民連副会長	
15:00 ～	15:25	（ 25 分）	実践報告③（実需者）	（案）金トビ志賀　蒲郡市	
15:25 ～	15:30	（　5 分）	休憩（設営変更）		
15:30 ～	16:25	（ 55 分）	意見交換・質疑	代表質問：朝倉裕貴	
16:25 ～	16:30	（　5 分）	まとめ、閉会		